

## 平成24年度香川大学卒業式 学長告辞

香川大学構内の桜の蕾も春の到来とともに一斉に開こうとし、瀬戸の島々にも穏やかな早春の波が打ち寄せています。

この希望に満ちた春の訪れとともに、香川大学は未来を見つめ、目を輝かせた卒業生 1,219 名と共に卒業式を迎えています。

学位記を授与された皆さん、誠におめでとうございます。

また、本日までご子弟を支えてこられたご家族や関係の皆様方にも心からお祝いを申し上げます。

皆さんは4年または6年間の学生生活に思いを馳せ、これから進む社会や大学院に希望を抱き、新たな闘志を燃やしていることと思います。香川大学はそのような皆さんを応援し続けます。

さて、現在の日本は第三の転換期と言われています。第一の転換期は、幕末維新です。明治維新を経て日本が世界の仲間入りをする時代、第二の転換期は第二次世界大戦の敗戦、焼け野原の中から先輩たちの懸命な努力により奇跡的な復興を果たしました。第三の転換期である現在は、政治経済等あらゆる分野において急速にグローバル化し、また価値観が多様化し、これが正解と言うゴールの見えない転換期だと思うの

です。

前の二回の転換期は、黒船や戦争という外圧で無理やり変えられたという側面がありますが、現在の転換期は、そのような圧倒的な外圧は無く、自ら強い意思を持って“これからどうやって生きていけばよいか”を模索し続けねばならないでしょう。

例えば、企業に就職するとして。かつては、「終身雇用」という言葉があり、会社が一生守ってくれるという時代がありました。しかし、現在は何一つ確実に保証をしてくれるものはありません。就職後、皆さん自身がどのような企業にしようか、その為には自分は何が出来るか問い続ける時代なのです。

20世紀の文明は何だったのか。生活の豊かさや利便性の追求が人間の幸せに繋がると信じてやって来ました。しかし、世界的経済の低迷の中で、人の幸せとは何かを見直すという心も芽生えてきました。それを現実として我々に認識させたのが、平成23年3月11日の東日本大震災及びそれに続く社会の混乱です。我々自身は自然に生かされているのです。尊い犠牲を払い、我々は傲慢さとライフスタイルを変え、何かを変えなければならないと腹の底から教えられました。

そのような意味において、こうした時代を生きる皆さんは大変な時代に生

まれ育ったと思います。

偉大な実業家である松下幸之助氏の言葉に、“何としても二階に上がりたい。どうしても二階にあがろう。この熱意こそが梯子を思いつかせ、階段を作り上げるのだ。上がっても上がらなくてもと考える人の頭からは、梯子も階段も生まれぬ”というのがあります。すなわち、“やる者はやらない者に勝つ”ということです。

本学を巣立つ皆さんは、大変な転換期に生まれ合わせた歴史の証人です。努力をすれば誰もが明治維新や戦後復興に名を連ねた偉大な改革者になれる時代です。学生生活を通して培った各々の信念と得意の分野で、“自分ならこれをやる”“自分の感性を信じて二階に上がるぞ！”とチャレンジして下さい。楽な道より厳しい道を選べば、リスクは大きくなるかもしれません。失敗や挫折はつきものでしょう。しかし、その努力は、皆さんを鍛え、確かな自信とプライドとして一生皆さんを支え続けるでしょう。

最後に、宮沢賢治の詩“生徒諸君に寄せる”を紹介しましょう。

“生徒諸君 諸君はこの颯爽たる 諸君の未来圏から吹いてくる 透明な  
清潔な風を感じないのか それは一つの送られた光線であり 決せられ  
た南の風である”

その後、世相のうつろいを詠んだ後、最後に、“ああ諸君はいま この颯爽たる諸君の未来圏から吹いてくる 透明な風を感じないのか”

皆さんには、研ぎ澄まされた若い感性を縦横に駆使し、世界を、時代を変化させ、新たな時代を創る力があるのです。困難なときであればなおのこと、理想や夢に向かってたゆまない努力を続け、目の前の課題を一つ一つ解決して、幸福度の高い社会を創っていただきたいと思います。

私は学長として、この香川の地で育った皆さんを誇りに思います。そして、皆さんの新しい門出に万感の思いで祝福を送ります。

重ねて皆さんの学位記授与を祝し、皆さんの健康とますますのご活躍を心から祈念して告辞といたします。

平成25年3月24日

香川大学長 長尾 省吾